

05 根岸 雄一

東京理科大学理学部応用化学科 講師
(前 物質分子科学研究領域 助教)

分子研での思い出

ねぎしゆういち / 1996年慶應義塾大学工学部化学科卒、2000年同大学大学院理工学研究科博士課程中退、同大学化学科助手、分子科学研究所助手(助教)を経て、2008年4月より現職。



2000年7月から2008年3月まで、佃Gの助手(助教)として7年9ヶ月、分子研にお世話になりました。大変恥ずかしながら助手(助教)としての任期を大きく超えつつ長いこと在籍させていただきましたので、入所したときと出所したときとでは周りの先生方や研究室の顔ぶれも大きく変わっています。この7年9ヶ月の間、佃先生、茅所長、中村所長をはじめ、大変多くの先生方や研究仲間にお世話になりました。この場をお借りして心より感謝とお礼を申し上げます。

分子研での思い出はと申しますと、分子研には新進気鋭の研究者の方が沢山いらっしゃいますし、そのような方々と出会い、話し、飲む機会が沢山ありましたので、刺激的なことが多く、思い出も数多いのですが、その中でも研究室の立ち上げに参加できたことが私の中ではもっとも印象深く、また良き経験となっています。

着任前の慶應時代、同期の十代氏(現

西G助教)が隣で研究に装置開発から取り組んでいるのをみていて、いつか自分も研究課題については装置制作も含め全て最初から取りくんでみたいと思っていました。そうしたさなかに佃Gの研究室立ち上げ時の助手として採用していただき、課題・装置のみならず研究室自体も0から始めることになり、このことに大きな興奮を覚え、鼻息荒く岡崎に乗り込んだことを今でも良く覚えています。

現実的には当時の私は学位も持っていない半人前で、研究課題である金属クラスターの化学合成についても多くの未経験の状態でした。着任当初は実験もほとんどうまくゆかず、目的達成に向けた方法論も何度も変え、装置も幾度となく作りかえることになりました。ラボとしてはこの時期、何年も出口の見えない状態にも陥ってしまい、その結果、佃先生には(分子研レターズ57号に執筆されていたように)記憶を失うほどの御苦勞をおかけするこ

ともなり、このことについては大変申し訳なく感じています。ですが、ラボ立ち上げ、分子研ならではの課題への取り組み、素晴らしい研究環境など、私にとっては全てのことが新鮮で、興奮を覚えたというのが当時の思い出です。また、この時期のトライアンドエラーの中、多くの実験技術や考え方を学ぶことができ、そもそも研究とはどういったものなのかということ自体も学ばせていただき、この時期の経験が私の研究人生における大きな糧ともなっています。そのような機会を与えてくださった分子研と佃先生には大変感謝しております。

この4月から私は今度は東京理科大学にて自分自身の研究室を立ち上げています。分子研時代に得た良き経験をいかし、すこしでも分子科学に貢献できる研究室をつくってゆきたいと思っています。